VITALITE インタビュー

マダム・ジャポンは「中世」に夢中

翻訳家
福本 秀子
聞き手：佐多保彦　株式会社 東機貿　代表取締役社長

ふくもと・ひでこ
横浜市生まれ。
1955年、慶応義塾大学経済学部卒。
パリ大学法経学部博士課程修了。
翻訳家。訳書に、レジーヌ・ペルヌー女史の『中世を生きぬく女たち』『十字軍の男たち』（白水社）『甥に語る中世』『十字軍の女たち』（パピルス）など。著書に『ファム・エ・サムライ』、『マダム・ジャポンは袋だたき』（社会思想社）など。

佐多：福本さんは、主婦業と翻訳業を見事に両立され、先年は日本人の翻訳家では初の「フランス文学翻訳者奨学生」としてフランス政府から招かれて留学もされています。その時の経験談やフランス文化への思いなどはご著書『マダム・ジャポンは袋だたき』（社会思想社）に記しておられますね。

福本：ええ、私は大学を卒業してからフランス語の魅力にとりつかれました。その後たまたまフランスの歴史家レジーヌ・ペルヌー女史にお会いして、こんどは中世に夢中になりました。

佐多：中世の何処に魅力を感じられたのですか。

福本：ペルヌー女史が中世の女性を書いておられますから、正確に翻訳するためにはその時代を知らなければならず、いろいろ調べているうちに中世の虜になったというわけです。ある種の文学や科学は、中世で頂点を極めているように思えます。医学も。その時代のヒルデガルドという女性が著した医学の本など、今でも参考書として用いられています。すべて中世が土台であり、我々はこれを少し発展させているだけなのかもしれません。たいへん興味深い時代です。

佐多：ペルヌー女史が中世の女性を浮き彫りにされる中には、どのようなメッセージがあるのでしょうか。

福本：まず、現代は中世の回帰である、というペルヌー女史による新しい見解があります。中世では女性の権力が強く、財産のある「中流の上」以上の女性は夫と対等の権利をもっていたのですね。また、そういう女性との関係性で時代を見ないと中世は面白くない。中世の女性の在り方から鑑みて、今の時代は中世に帰らなければいけないというのが、ペルヌー女史のまず第一のメッセージです。

佐多：女性が男性と同様なレベルに立っていたということ。ペルヌー女史の『十字軍の女たち』（パピルス・1992）には、女性も十字軍に参加していた事実が書かれていますね。十字軍といえば男だけの必死な戦いのイメージがあったので、司教に励まされて女性たちも遠征に行ったというのには驚きました。

福本：女性も、子どもも、一家で行った。引越しみたいなものです。戦争というよりは、エルサレムへの武装巡礼ですから、一緒に行ったのでしょうね。男性とともに戦いに参加した事実などは、ペルヌー女史の研究で明らかになったわけです。だからといって彼女は男女同権については一切言っていません。男性は男性らしさ、女性は女性らしさを大切にしてできることをすればいい、というのがペルヌー女史の二つ目のメッセージです。彼女はウーマンリブには批判的ですし、魔女の考え方も否定しています。ことにジャンヌ・ダルクが魔女と言われて処刑された話は、ジャンヌ・ダルク研究所創立者としてペルヌー女史は許せないようです。

　またペルヌー女史が訴えた、忘れてならないもう

一つのメッセージは、「すべての可能性はあなたの内にある」ということです。

佐多：現代の人が中世の女性から学ぶべきところといったら、何になりますか。

福本：学ぶべきは、自分は何でもできるという「確信」と、それをどうしてもやり遂げたい「欲」をもつ事ですね。

あの時代、中流以上の家では、女性であれ男性であれ、学問は家庭教師について勉強するか、修道院で習いました。その点で男女差がないので、結婚しても女性は夫にできることは自分もできる、と考えました。日本の中世とは大きく違いますね。日本では、自分が何かできる、などという考えは女性にはなかった。母、妻、妾、愛人、乳母、姑という6種の女性が、たった一人の男を一人前にするために、陰のもり立て役に回ったような時代です。女性が表に立つ場などどこにもありませんでした……。

ところが中世フランスでは、女性にも領地はこれだけ、財産はこれだけ欲しいという、はっきりした物欲が出てくる。これには逞しさ、エネルギーを感じますね。お金や財産がなければ人生は楽しめない、というような今の時代にも通じる考え方が、中世には女性にもあったと考えられます。そして、ここから生命力も出てきたのではないかと思うのです。

でも、そんな彼らも教会に寄進する場合は欲得抜きでした。司祭に祈りを捧げてもらうことで、天国での幸福が得られると信じていたから、自分の死後もきちんと祈ってもらうために寄付する。それも、夫の名前でなく、自分の名前で寄付する。寄進のためにも彼女らに財産は必要だったのでしょう。ある程度宗教心が関係して、物欲も強かったのかもしれません。

佐多：非常に信心深かったようですね。中世の人たちにとっては、神の存在も近いものだったと思われますか。

福本：ええ。常に神の声を聞いていたと思います。彼らは心から神を信じていましたから、神は実際に存在するものだったでしょう。神を求めて野原に立てば、神の声をも聞いたはずです。ジャンヌ・ダルクの場合も、実際に神の声を聞き、幻想ではなく本当にその姿を見て行動したのだと思います。

現代でも、神とか、悪魔とか、先祖の霊とか、表現できない何らかの力や宇宙からのパワーみたいなものは我々の周りにも満ちていて、十分に心が統一できればそのメッセージを聞けないまでも何か感じられたりするのかもしれません。空気も自分も対象も汚れているから、できにくくなっているというだけで……。

私は、自分が中世に生きていたらどうだったろう、と思うのです。第四次元のものが本当に見えたりしたら、素晴らしいでしょうね。そんな、中世の神秘的なところにも、私は惹かれるんです。

佐多：では、中世に魅せられた福本さんの「生命力」についてのお考えを聞かせていただけますか。

福本：そうですね。「生命力」は、運の善し悪しを左右するものという気がしています。「生命力」のない人には運が向いてこないのではないか、と。

今、やはりペルヌー女史著の『王妃アリエノール・ダキテーヌ』（パピルス・1994出版予定）について訳しているのですが、彼女は2度結婚しているのです。最初はフランス王ルイ7世と結婚する。この人は、王位を継ぐはずではなかったのに兄が死んだために王になった、あまり「生命力」の強くない人。何をやっても運がない。

一方、アリエノール・ダキテーヌは、華やかで美しく「生命力」に溢れているので、運から近づいてくる。彼女はルイを捨てイギリス王ヘンリー2世と結婚して幸せを掴むんですね。このヘンリー2世がまた相当に運が強い。ここぞというときに嵐が去ったり、また逆に風が味方したりして戦に勝つのですね。運というのは「生命力」と本当に関係が深い、とこの物語でも痛感しました。

同じようなことは、もちろん十字軍にもあったと思います。戦争で無残な死を遂げたり、ここぞというとき負けたりする人はやはり運がなかった。

でも、結局、運も「生命力」も自分でつくるものですから。

佐多：「運が7割、努力が3割。運は人との関わりを求めて自分がつくっているとも言える」と福本さんは著書に書いておられますが、その積極性、素晴らしいエネルギーはどこから？

福本：私にとっては運のある人、「生命力」のある人を多く友人にもつことがまず重要なポイント。それと自分には運がある、幸せな星の下に生まれている、と暗示をかけることですね（笑）。また、「生命力」があるというのはいつもキラキラとしていることでしょう。私はそういう力は好奇心から生まれると思っています。何に対しても興味をもち、もう一歩突っ込んでみる。自分に何かチャンスが与えられた時は、どうしようかなと考えずに受け入れる。例えば、私にまさかこんなことできるはずがない、という申し出があっても、私は絶対辞退しないんです（笑）。

佐多：マダム・ジャポンのキャッチフレーズ「チャンスを生かす」は、同時に「生命力」のキーワードにもなるということでしょうか。本日はどうもありがとうございました。